延暦寺発掘調査報告書 Ⅲ

― 里坊・護心院跡の調査 ―

1982

滋賀県教育委員会

賀県文化財保護協会

序

史跡延暦寺は、境内の過去何回かの発掘調査によって、歴史・考古・建築・宗教の各分野で、多くの資料を提供してきましたが、比叡山の山麓にあり、美しい町並と里坊の石垣で知られる坂本は、これまで考古学的に調査される機会がなく、地下遺構の状況については殆んど不明の状況でありました。ところが今回、叡山文庫の改築に伴い、はじめて里坊の発掘調査を行なったことにより、叡山文庫が護心院跡に建てられていることや、近世に至って里坊を整備する際に、大規模な地割がなされたこと、また、現存しないが中世以前にはこの地に古墳があったことなど、これまで知られていなかった事実が明らかになりました。このようなさまざまの興味深い成果をあげることが出来ましたのも、延暦寺ならびに関係者各位の深い御理解と御協力によるところ大きく、ここに調査結果を公刊するに当って厚くお礼を申しあげる次第であります。本書が、研究者のみならず、広く県民の方々に利用されるなら幸いであります。

昭和５７年３月

滋賀県教育委員会
文化財保護課長
外池忠雄

00/.2
N/27

例　　言

1.　本書は、延暦寺の実施する叡山文庫改築に伴う、里坊の発掘調査報告である。

2.　本調査は、滋賀県教育委員会が財団法人滋賀県文化財保護協会、延暦寺の協力を得て実施した。

3.　調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者とし、滋賀県文化財保護協会嘱託山口順子を主任調査員に得て実施した。

4.　現地調査および整理にあたっては、尾崎好則（滋賀県文化財保護協会嘱託）、米田実、南直樹（立命館大学）、堀内宏司（調査員）、河内美代子、江南亜子（近江文化財研究所）、寿福滋（遺物写真撮影）の諸氏をはじめ、延暦寺管理部、小野建築事務所の協力を得た。記して厚く感謝の意を表するものである。

5.　本書は、1～3を山口順子、4を堀内宏司、5を山口順子、兼康保明、出土近世陶磁器類観察表を山口順子、河内美代子が執筆した。

目　　次

はしがき

例　言

第１章　はじめに……　1

第２章　調査の経過……　2

第３章　調査の結果……　4

1.　第１トレンチ

2.　第２トレンチ

3.　第３トレンチ

第４章　遺　物……　7

1.　第１トレンチ

2.　第２トレンチ

3.　第３トレンチ

第５章　むすび……１２

図　版　目　次

図版１　遺跡位置図
図版２　遺構（１）
（上）事務所正面
（下）第１トレンチ（西より）
図版３　遺構（２）
（上）第１トレンチ（東より）
（下）石組遺構（北より）
図版４　遺構（３）
（上）第２トレンチ（南より）
（下）第３トレンチ（南より）
図版５　遺物（１）
図版６　遺物（２）
図版７　遺物（３）
図版８　遺物（４）
図版９　遺物（５）
図版10　遺物（６）
図版11　遺物（７）
図版12　遺物（８）
図版13　遺物（９）
図版14　遺物（10）

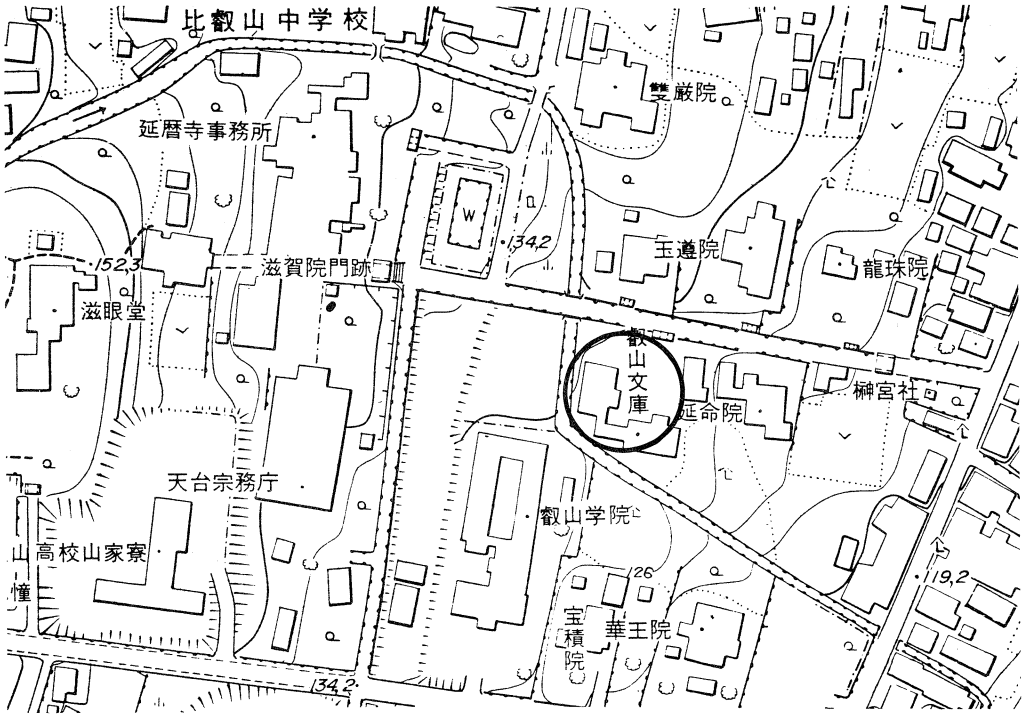
挿　図　目　次

第１図　調査地点位置図……　1
番２図　トレンチ配置図……　3
第３図　第１トレンチ遺構実測図……　5
第４図　第２トレンチ遺構実測図……　6
第５図　遺物実測図……　8
第６図　遺物実測図……　9
第７図　遺物実測図……１０
第８図　遺物実測図……１１
第９図　叡山文庫付近の町並……１４

第1章　はじめに

比叡山の山麓に位置する坂本は、日吉大社、東照宮とともに、延暦寺里坊の景観や庭園が注目される歴史的な町である。現在里坊は49坊、坊跡は10カ所が数えられ、滋賀院門跡を中心に、作り道・横小路から西側、北は大宮川、南は大和庄付近までの範囲にだいたい分布している。

古代から霊山として信仰されてきた比叡山に、延暦７年(７８８)最澄が山家学生式の考えを基本とする比叡山寺を創建して以来、山上は籠山修学の場として発達をとげた。東塔、西塔、横川の三塔十六谷に建立された堂塔伽藍は組織化され、中世に至るまでに「三千僧房」といわれるほど相当な数になっていった。当然、山上伽藍の一山大衆（衆徒、堂衆、山徒）のために食料、物資などの調達、運搬が必要となった。そこで、延暦寺と不離一体の関係をもつ麓の坂本が、その根拠地として発展をはじめる。そしてさらに、坂本は上・下二つに分れた。湖岸には戸津、今津、志津の３つの港が開かれ、中でも、上坂本の八条通りが東にまっすぐのびて北国街道にあたる地点の戸津が、中心の港として栄えた。水運だけでなく陸上交通のうえでも、室町時代には比



第１図　調査地点位置図

叡辻付近の馬借達の活躍がみられる。また、上坂本は日吉社、延暦寺参拝者達の休憩、宿泊地としても発展する。このように、水路、陸路で各地の山門領から運ばれた年貢物や山上での消費物資、参拝者達、宗門の人々は、下坂本から延暦寺へ上っていった。

こうして延暦寺の隆盛とともに繁栄した坂本であるが、元亀２年（1571）織田信長の比叡山焼き打ちの際、坂本にも戦火が及び衰退する。その後、豊臣秀吉によって延暦寺が再興されるが、もはや中世の繁栄をとりもどすまでには復興しなかった。

近世になると山上と麓の関係に変化がみられるようになる。天台座主が坂本に常住するようになり、滋賀院門跡が延暦寺本坊として成立すると、延暦寺の事務機構も坂本に移り、麓に居住する僧侶が多くなって里坊が営まれるようになった。たとえば、還暦をすぎた修行僧が座主から許可を得て、山を下りて里坊に居住するようになったり、あるいは、東塔は止観院、西塔は観泉坊と生源寺、横川は弘法寺をそれぞれ総里坊として、一般寺務を行うようになった。三塔それぞれに属する里坊は、概ね、東塔系が八条通りから大和庄付近にかけて、西塔系が八条通りから日吉の馬場付近にかけて、横川系が梅辻から北側に分布している。その後、明治になって廃仏毀釈などで里坊が廃絶したり、移築されたりして、里坊の数は減り、名称が変わっているものもある。

「叡山文庫」は、大正10年に伝教大師一千百年遠忌法要の記念事業の一つとして建てられたものである。文庫には延暦寺関係の数万冊の記録、文書、経典、古図などが収められており、一般に公開されている。収蔵庫、事務所、木造家屋１棟が建てられていたが、敷地の北側にある石垣は、文庫が建てられる以前に桧の苗場に使われていた時から、残っていたものであるという。

第２章　調査の経過

調査地は、滋賀院門跡前、御殿の馬場を東に約70ｍ下がった所に位置し、東隣に延命院、道をはさんで西隣に叡山学園のテニスコートがある。

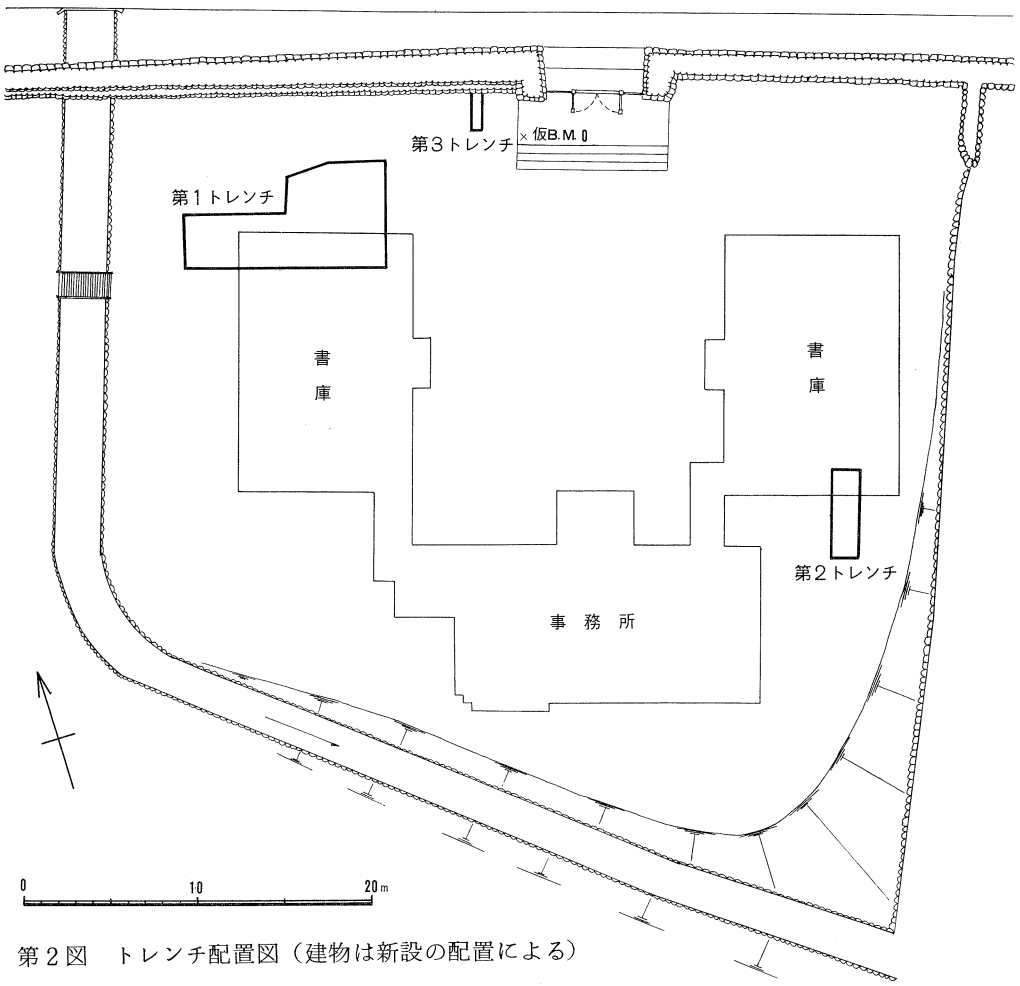
発掘調査は、昭和56年４月８日から23日まで行った。新築の建物は現在の建物とほとんど位置が重複し、旧建物の地下は基礎工事で破壊されているため、新しく掘削される個所にトレンチを設定し、小型のバックホウを使って土を除去しながら調査する

ことにした。

まず、収蔵庫の北側に第１トレンチを設定した。表土直下で江戸時代の遺物を伴う石組遺構と、古墳時代、中世の遺物を含んだ落ち込みが検出されたため、さらにトレンチの東半分を北へ拡張した。その結果、この落ち込みが溝状になり、また整地されていることが判った。

第２トレンチは事務所の東側に設定した。表土下約1.4ｍまで掘り下げると、「穴太衆積み」の石垣のコーナー部分と、石垣に付属した排水施設を検出した。

最後に、門の西側の石垣の際に第３トレンチを設定した。石垣の基底部を検出した以外は遺構らしいものはなく、埋甕が１点出土しただけであった。



第２図　トレンチ配置図（建物は新設の配置による）

第3章　調査の結果

（1）第1トレンチ

最初、収蔵庫の北側に、建物に沿って3.0×11.5ｍのトレンチを設けたところ、表土約20cmを除去した段階で、トレンチの中程にほぼ北東方向に連なる石列を検出した。詳しく調べると、この石列は東側の面が揃っており、幅40cm、深さ20cmの素掘りの排水溝を設けていることがわかった。さらに西側で、幅約20cmの敷石の溝の一部を検出した。石列よりも若干東に方向が振れており、雨落ち溝と思われる。石の配置からみて、建物の北東部分にあたると考えられる。この他に礎石等の明確な遺構はなかったが、トレンチの北辺にそって落ち込みが検出された。

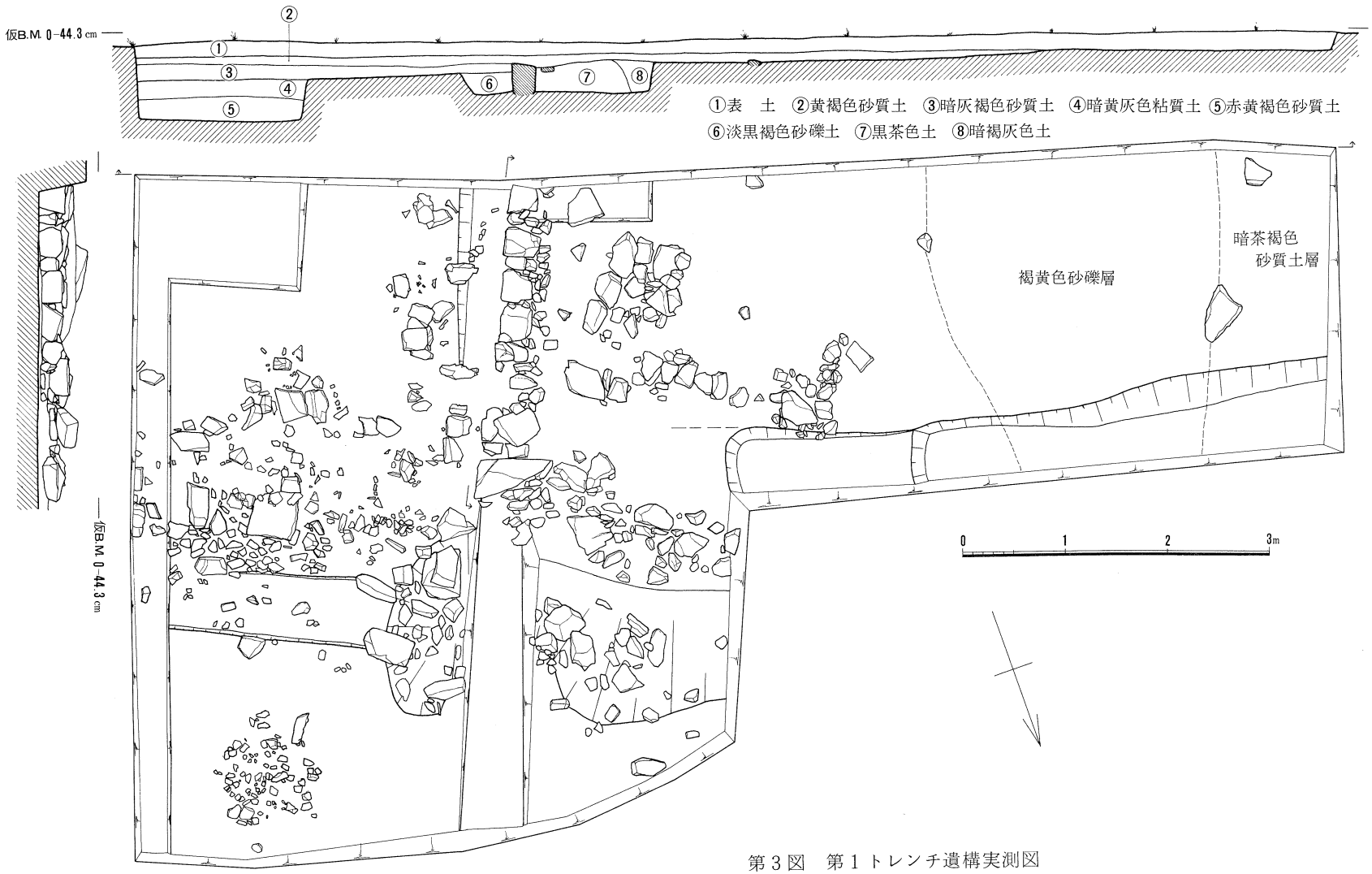
次に、遺構の広がりを調べるためトレンチの東半分を北側に拡張したところ、石列の続きは検出されなかった。そして、落ち込み部分が幅約３ｍ、深さ約60cmの東西方向の自然流路と思われる溝になることが確認できた。また、検出状況からみて、石組遺構をもつ建物が、溝を埋め整地した上に造られていると考えられる。

遺物は、溝から古墳時代の須恵器の甕、坏類、中世の土師器、陶磁器類が出土しており、石組遺構からは、江戸時代後期と思われる時期を中心とする陶磁器類が出土している。

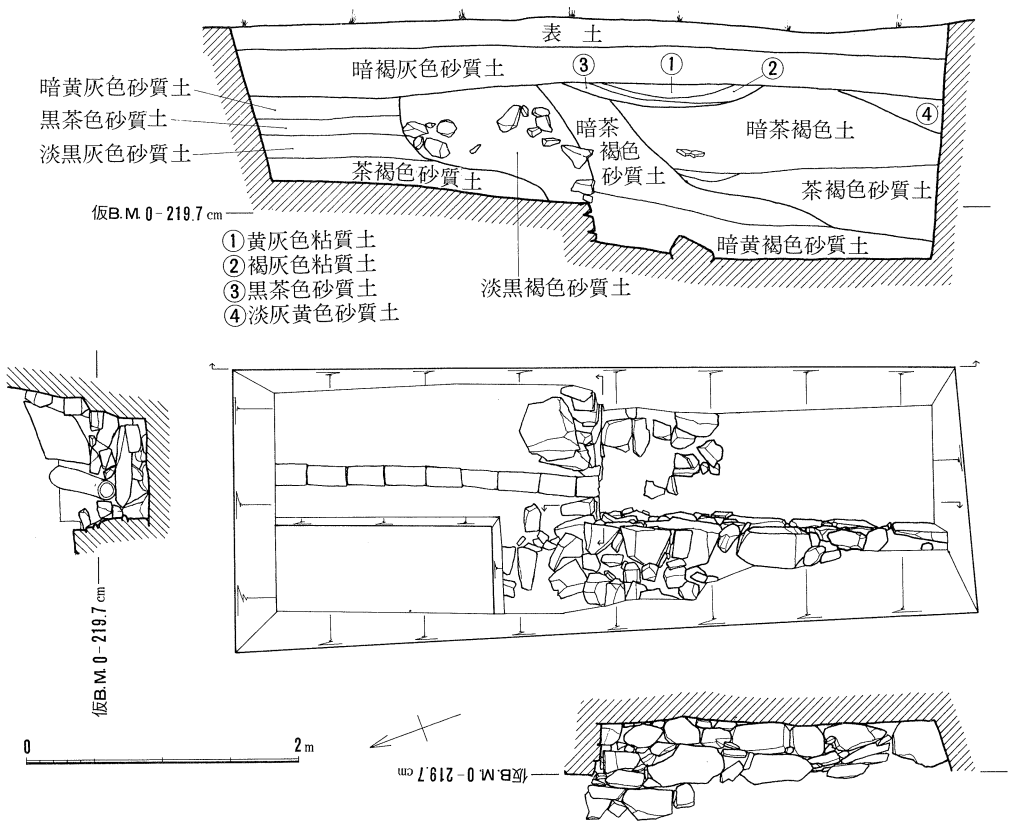
（2）第2トレンチ

事務所の北東側に、建物に平行して1.5×5.0ｍのトレンチを設けた。表土から約1.4ｍ掘り下げたところで、石垣のコーナー部分が検出された。石垣は基底部から2～3段が残っており、石垣の面は、トレンチの外へそれぞれほぼ南東、南西方向に続いている。北東面のコーナー近くには、瓦製の円筒（図版14）を9個以上連ねた排水施設が設けてあり、ほぼ8度の傾斜角度をもつ。瓦筒の大きさは、内径10.5cm、長さ29.5cmで、出口の瓦筒は半截して使われていた。また、水の落下地点には、明確にはわからないが、石が敷いてあったと思われる痕跡がみられる。この石垣はいわゆる「穴太衆積み」であり、約40cm大の石を使い、大きい自然面を利用して石が積まれている。

遺物は、埋土内から須恵器の甕の破片、中・近世の土師皿、陶磁器類、煙管等が出土しており、また、北東面の石垣の整地層からは、12世紀から14世紀にかけての輸入



第３図　第１トレンチ遺構実測図



第４図　第２トレンチ遺構実測図

陶磁器の白磁、青磁片が出土している。

この石垣は、基底部がしっかり残っていること、整地層が撹乱をうけていないこと、遺物の埋土状況等からみて、この地に里坊が建てられた時のものと考える。

（３）第３トレンチ

門の西側に石垣と直交して、0.5×2.0ｍのトレンチを設けた。表土は建物付近に比べて石垣側が高く盛られており、石垣の基底部は表土から約40㎝掘り下げたところで検出された。また、石垣から約1.5ｍ離れて陶器の甕（189）が出土した。これは意識的に埋めて置かれていたものであり、野つぼの可能性がある。調査前は表土に埋まっており、使用されなくなってから久しいものと思われる。遺物からみて、年代的には叡山文庫が建てられてから後のものではないかと考えられる。

石垣の積み方は、第２トレンチの石垣に比べて小さい石を使っており、石の面も不揃いである。

第4章　遺　　物

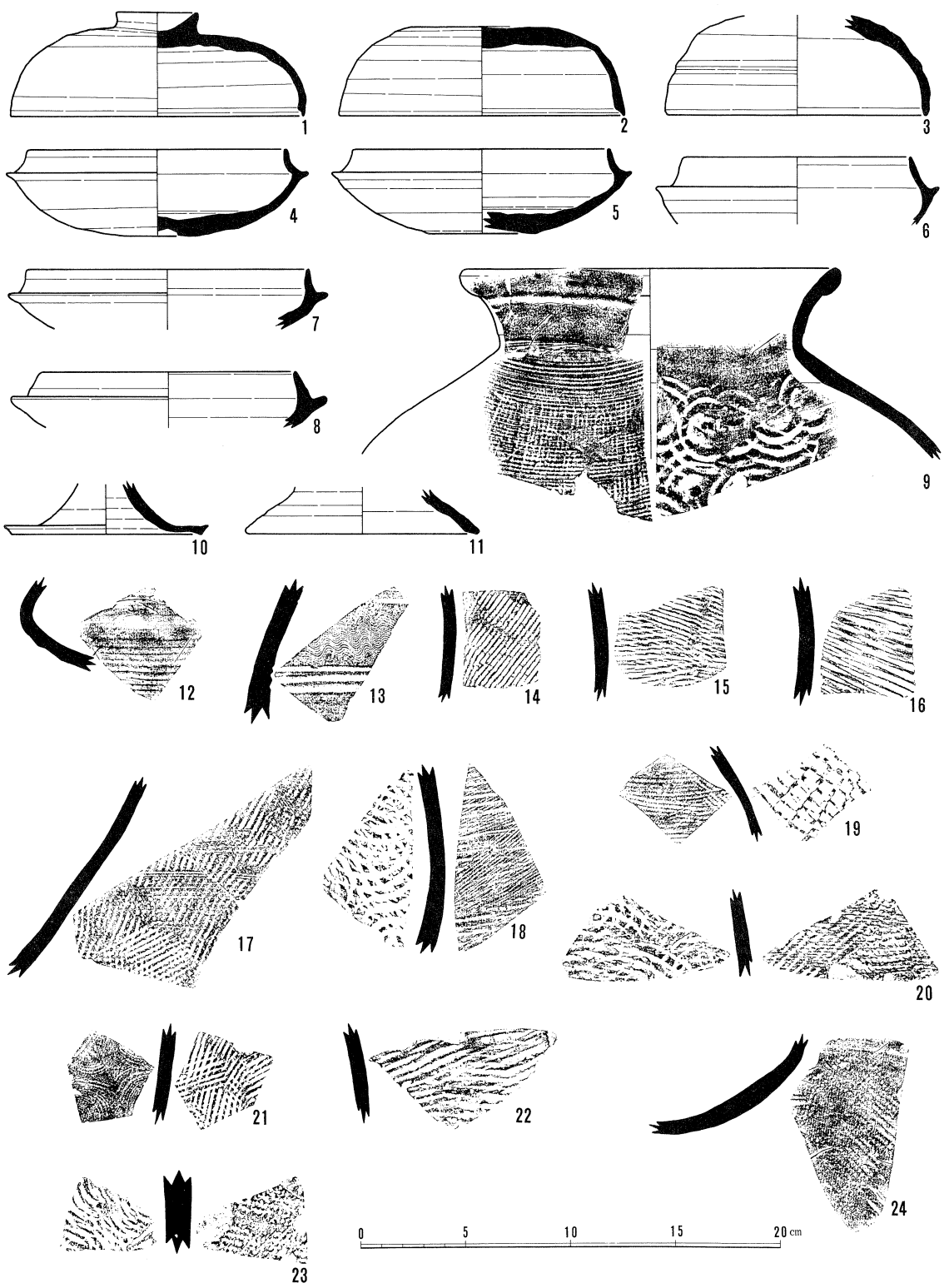
（1）第1トレンチ

古墳時代　須恵器の坏、壷、高坏、甕などの破片が出土している。有蓋高坏の蓋（1）は口縁端部内面に内傾する段をわずかに残し、天井部には篦削りを施す。坏蓋（2、3）も口縁端部内面に内傾する段をわずかに残すが天井部は不調整である。坏身（4～8）の受部はほぼ水平に張り出し、立ち上り部は（8）を除いてやや外反している。坏蓋と同様に下方に篦削りを施し、底部は不調整である。壷（9）の口縁部は外面がやや肥厚し、体部は大きな球形になるものと思われる。高坏の脚部は、裾部が大きく外に開くもの（10）と、やや外反ぎみに開くもの（11）との2種類があり、やや時期的に前後するものと思われる。甕、壷の破片（12～19、24）のうち、（16、19）は歴史時代にまで下るものかもしれない。

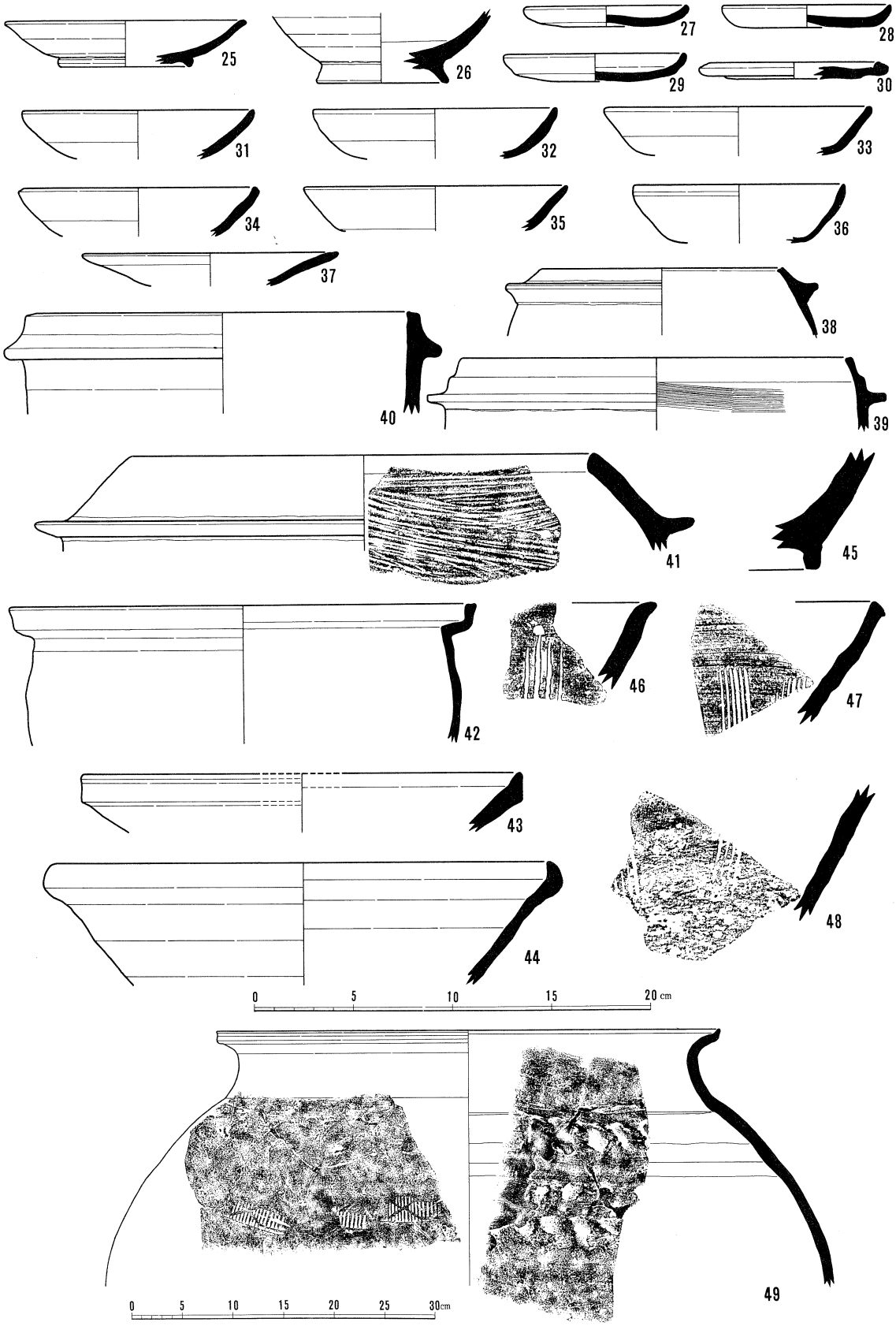
その他に図示しなかったが、土師器の高坏の脚柱部（196）もある。

歴史時代　灰釉陶器の皿（25）は口縁端部がやや外反し、高台は短い。灰釉陶器の椀（26）は外反する高台がつく。他に糸切痕を残す底部（77）がある。土師器の皿は大小種々なものがあるが、概ね口縁部に横ナデを施し、口縁部下方及び底部は不調整のものである。ただ、口縁端部を内側に巻きこむもの（30）や、口縁部が外反して大きく開くもの（37）もみられる。また、（36）はあるいは椀になるかもしれない。羽釜は瓦質（38、39）と土師質（40、41）の2種類がある。鍔部は水平かやや上向きであり、鍔部より下方には煤の付着がみられる。そして、内面は恐らく4点とも刷毛目を施していたものと思われる。瓦質の鍋（42）は口縁部が受け口状になり、羽釜と同様に頸部より下方には煤の付着がみられる。須恵器の鉢（43～45）は、口縁部が肥厚し、この部分のみ色調が濃く黒ずんでいる。底部には直立した高台が付く。信楽の摺鉢（46～48、70）は口縁部が外反し、内面に数本の条痕を施す。常滑の大甕（49）は、口縁部が大きく外反し、口縁端部を上方につまみ出す。内面頸部より下方に、粘土紐巻き上げ痕及び指圧痕が明瞭に残る。（60、62、63）は常滑の甕の押印である。瓦器の皿（192）は口縁部を外反させ、作りは比較的丁寧である。内面に渦巻状の暗文を施している。

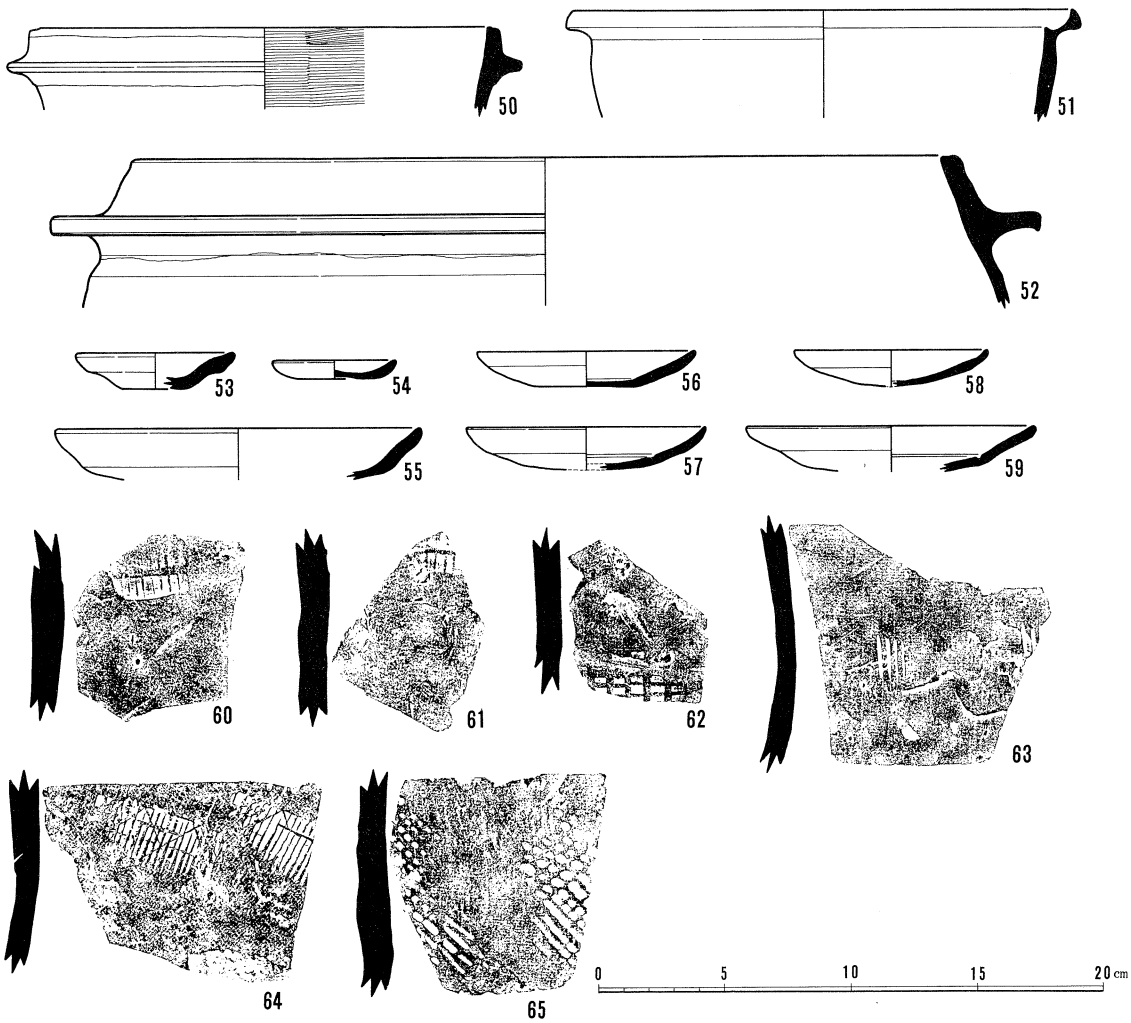
輸入陶磁器としては、玉縁のつく白磁碗（84）とその底部（86）、白磁の鉢底部（



第５図　遺物実測図


25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
40
39
41
45
42
46
47
43
44
48
0 5 10 15 20 cm
49
0 5 10 15 20 25 30cm

第６図　遺物実測図



第７図　遺構実測図

88）、鎬蓮弁を外面に施した青磁碗（94）等が出土している。

その他の遺物としては、三足鍋の脚部（195）、土錘（194）、円板と思われるもの（66）、煙管の雁首（191）等が出土している。（66）は須恵器の胴部を再加工した中世の遺跡でよくみられる円板で、外面は格子叩き、内面はナデである。長径4.55cm、短径4.3cm厚み0.9cmで、色調は淡青灰色である。（191）は受け皿が欠損しており、胴の巻き合わせた接合部分には、外側から別に金属をあてて補強している。

近世陶磁器類については、主なものは遺物観察表に記したが、他にも近・現代の遺物としてランプの火屋（185、186）、砥石（187）、水甕、花生、急須、ワイン瓶、瓦等がみられる。

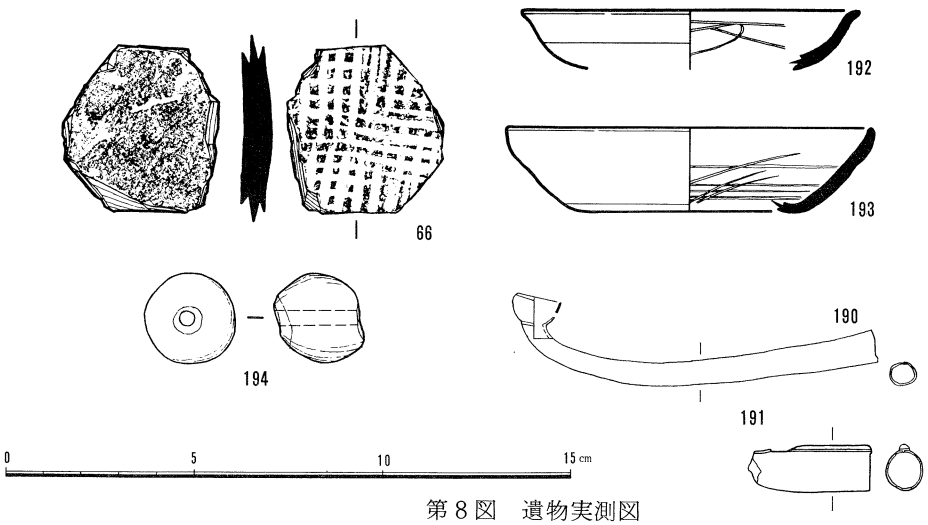
（2）第2トレンチ

古墳時代　第1トレンチと同様の須恵器片が出土しているが、小破片のため図示することはできなかった。（67、68）は壷・甕の口縁部、（20～23）は胴部破片である。

歴史時代　羽釜は瓦質（50）と土師質（52）の2種類あり、第1トレンチ出土品と同様、鍔部はほぼ水平であり、鍔部より下方には煤の付着がみられる。瓦質の鍋（51）は、口縁部がやや外面に肥厚しながら受け口状になっており、頸部より下方には煤の付着がみられる。土師器の皿は、口縁部に横ナデを施すもの（54、55）、ヘソ皿（53）と、内面に沈線の入るもの（56～59）があり、（56～59）は時期的に大幅に下るものと思われる。瓦器椀（193）は作りが粗く、内面には渦巻状の暗文が施されている。（61、64、65）は常滑の甕の押印である。（76）は須恵器の椀の底部、（78）は須恵器の鉢の口縁部で、端部を上方につまみ上げ、外面の色調は濃く黒ずんでいる。（69、71～75）は、信楽・常滑などの陶器の破片である。（79）は高台に段のつく近江産の緑釉陶器の底部、（80、85）は灰釉陶器の壷と思われる底部、（81、82）は瀬戸の破片である。

輸入陶磁器については、玉縁のつく白磁碗（83）、鎬蓮弁を外面に施した青磁碗（90、91、93）、青磁皿（89）、青磁の鉢（92）、青磁碗の底部（87）等がみられる。

その他の遺物としては、煙管の雁首（190）がある。これは受け皿の手前の方に小さな穴があけられており、胴の部分は巻き合わせて筒に仕上げている。



第8図　遺物実測図

近世陶磁器類については、第1トレンチと同様に遺物観察表に記しているが、量は少ない。

（3）第3トレンチ

近世～現代の陶器の甕（189）が1点出土した。

（4）遺物のまとめ

各トレンチ出土の遺物について、時期別に整理すると次のようになる。

古墳時代の須恵器の坏類は、陶邑古窯址出土遺物の編年[①]と対比すると、Ⅱ型式の4段階頃のものと考えられる。坏類以外の古墳時代の須恵器も、ほぼ同時期 ― Ⅱ型式後半と思われ、6世紀後半の年代が与えられよう。

歴史時代 ― 中世の遺物は、大きく3時期のものがある。1つは、灰釉陶器とそれに伴うであろうと思われる須恵器の甕（19）や土師器（30）の一群で、出土量はごく少量である。11世紀後半のものと思われる。次の時期は、12世紀後半、13世紀前半に比定できる遺物で、量的にも多く下層出土遺物の主流を占める。土師器の皿、釜、瓦質の釜、鍋、東播系の須恵器の鉢（片口大平鉢）（43）や甕、玉縁状口縁をもつ白磁碗や外面に鎬蓮弁を施した青磁碗などがこの時期に相当する。器種の組成は、高島郡高島町中ノ坊遺跡第102トレンチ出土遺物[②]のⅢ期のものに類似する。

中世の最も新しい一群は、瓦器[③]、東播系の鉢（44）、土師質土器の皿（37、53）や信楽の摺鉢などで、出土量は少ない。14～15世紀とやや幅がありそうであるが、戦国時代末期の遺物は含まれていない。

近世の陶磁器類は、日常生活用品が器種のほとんどを占めている。年代的には江戸時代後期のものが大半で、それ以前の中期のものと、それ以降の幕末期のものがごく少量混る。皿（129）などが江戸時代中期頃、湯呑（125、126）は幕末期と考えられる。この他、やはり少量ではあるが、明治時代の湯呑（128）やランプの火屋もみられる。また、（56～59）の内面に一条の沈線を施す土師質の皿は、江戸時代の特徴をもつものである。

第5章　む　す　び

今回の調査によって、小規模ではあるが初めて里坊の地下遺構を考古学的に検討す

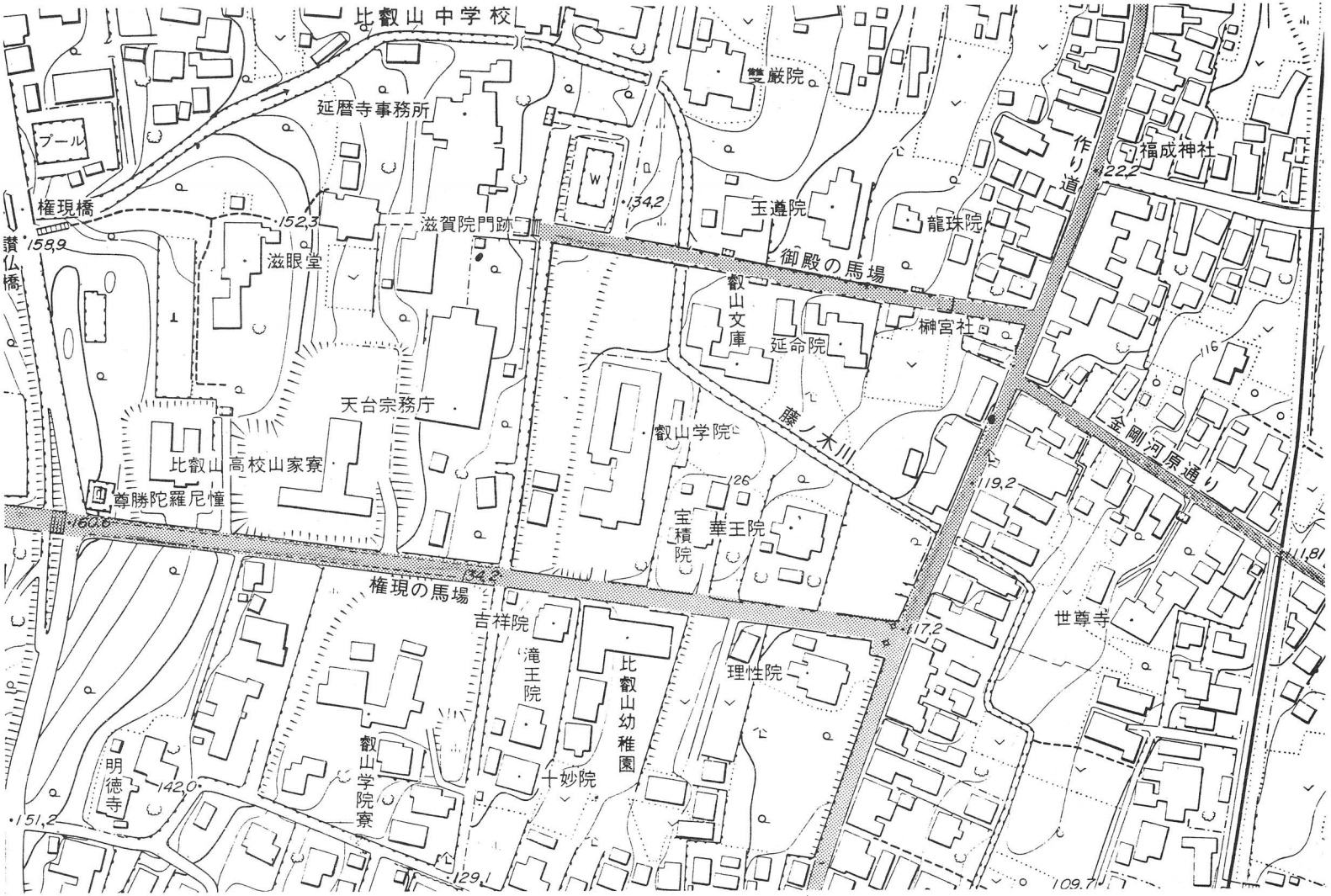
ることができた。延暦寺の関係者のご理解とご配慮に、感謝したい。里坊の遺構そのものは、叡山文庫の建物によってほとんど壊されており、遺構の一部を確認したにすぎなかったが、今後坂本を考えるうえで重要な成果を得たと確信している。今回の調査から導かれた成果と、問題点をあげてむすびとしたい。

調査地に江戸時代あった院坊の名称については、これまで里坊を紹介した何冊かの書物では不明とするものが多かった。しかし、護心院跡との古老の伝承もあり、それを手がかりに古絵図で照合を行った。その結果、年代の明記されている「日本志神廟仏刹部　比叡山延暦寺図　宝暦五年乙亥九月三日」（1755）には、明確に当該地に護心院の名が記されている。また、『新修大津市史』第3巻④で江戸時代中期頃のものではないかと推定された、「上下坂本略絵図」（叡山文庫蔵）の中にも、同じく当該地に護心院の名が認められる。こうした検討から、調査地を護心院跡と断定した。

次に、護心院を含む御殿の馬場付近の里坊の形成は、各トレンチの遺構、遺物よりみて近世 ── 江戸時代になってからのもののようである。その理由として、土層からみて大規模な削平、整地作業が認められないにもかかわらず、江戸時代以前の遺構の無いことがあげられる。遺物よりみても、12～13世紀のものを主流としており、14～15世紀のものを少量含むが、それ以降戦国時代、安土・桃山時代を飛越して江戸時代となり、途中断絶がみられるのである。また、中世遺物の主流となる12～13世紀のものも、建物遺構などに伴うものでなく、出土状況よりみてやや離れた場所で廃棄された遺物のたまりと考えられる。

以上のようなことがらから結論づけるなら、江戸時代の護心院以前には、この地に遺構とよべるものはなかったのである。元亀2年（1571）に織田信長の焼き打ちによって灰燼に帰した中世坂本の諸堂は、おそらく八王寺山麓にある日吉社を中心とした、今回の調査地よりも北方にあったと考えるべきであろう。

それでは、滋賀院門跡を中心とした御殿の馬場付近は、どのように江戸時代に開発が行われたのであろうか。今回の調査成果をふまえて、御殿の馬場の地形を眺めると、藤ノ木川の流路の不自然さがまず目につく。藤ノ木川の流れを、山麓から湖岸まで順に追って行くと、叡山文庫付近で流路が直角に曲り、この部分に最も不自然さが感じられる。この不自然な直角の曲りは、江戸時代の古絵図の中にも認められ、巨視的に見れば御殿の馬場付近に所在する各院の地割に対応しているようである。このことは、



第９図　叡山文庫付近の町並（$\frac{1}{2500}$）

本来まっすぐな流路をもっていた藤ノ木川が、江戸時代に滋賀院門跡を中心にして里坊が整備されて行く過程で、地割に合わせて川筋を改修したものと思われる。では、改修前の藤ノ木川は、いったいどの方向に流れていたのであろうか。現地形より流路の痕跡をたどると、御殿の馬場と直交する作り道をはさんで、東側の町並の中を走る金剛河原の通りが注目できる。この通りを、西から東へとさらに湖にむかって延長させると、みごとに藤ノ木川の河口につながるのである。おそらく旧河道は、山麓から御殿の馬場、あるいは御殿の馬場北側の玉蓮院、竜珠院を横切って、金剛河原の通りに流れていたと復元できる。金剛河原の地名は、おそらく埋立てられた旧藤ノ木川からつけられた、比較的新しい地名と思われる。

このようにみると、滋賀院門跡、御殿の馬場を中心とする地域は、江戸時代になってから新たに地割がなされて、整備されて行ったと考えてよいだろう。

この他に、第1トレンチの溝から出土した古墳時代の遺物については、比較的まとまりのある破片であること、土師器をほとんど含んでいないことから、古墳の副葬品の二次的な堆積ではないかと考えている。坂本周辺には、日吉大社境内、東照宮裏山などに古墳群があり、日吉馬場脇の妙行院北側に円墳と思われるマウンドが残っており、また調査地に隣接して明良古墳群があることなどから、里坊の所在する地域にかって古墳があったとしても不思議ではない⑤。これら古墳群のほとんどは、横穴式石室を内部主体とする後期のもので、その点でも出土した須恵器と年代的に矛盾しない。中世の坂本の開発で破壊され、さらにその上に近世の里坊があることから、古墳分布の空白地帯に忘れられた古墳群 ── 群集墳がかって所在していたことが推定される。

註

① 中村浩ほか『陶邑』Ⅱ（大阪府文化財調査報告書第29輯　大阪府教育委員会　昭和53年）

② 兼康保明「高島町中ノ坊遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅴ　滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　昭和53年）

③ 白石太一郎「越智氏居館跡出土の瓦器 ── 瓦器の終末年代に関連して ── 」（『古代学研究』85　古代学研究会　昭和52年）

④ 『新修大津市史』第3巻（大津市役所　昭和55年）　346頁、写82の解説。

⑤ 景山春樹「土師式合口甕棺葬の一例 ── 近江坂本蓮華院遺跡について ── 」（『仏教考古とその周辺』　雄山閣　昭和49年）

追記

里坊と藤ノ木川の問題については、帝塚山大学教授景山春樹先生より多々ご教示をうけたほか、里坊関係の古絵図の調査については、大津市史編さん室長木村至宏氏よりいろいろとご配慮賜った。また、報告書のまとめにあたって、滋賀県文化財保護協会理事西田弘先生より全般にわたってさまざまなご教示を得た。文末ではあるが、記して厚くお礼申しあげたい。

出土近世陶磁器類観察表

器形	No.	地区・土層	備考
碗蓋	95	第1トレンチ 暗灰褐色砂質土層	磁器。染付。外面は菊花文。内面は口縁部に桧垣文風な文様帯と、中央に松竹梅のつなぎ文。器高3.1㎝。
	96	〃	磁器。染付。外面は網代文などの地文。内面は口縁部に四方襷風の文様帯。口径8.6㎝、器高2.9㎝。
	97	第1トレンチ 黄褐色砂質土下層	磁器。染付。外面は岩にあやめ文、内面は口縁部に二条の圏線。器高2.4㎝。
	98	第1トレンチ 暗灰褐色砂質土層	磁器。染付。外面は寿字霊雲文。内面は二条の圏線、中央に寿字霊雲繋。
	99	〃	磁器。染付。外面は草文。内面は口縁部に二条の圏線。
碗	100	〃	磁器。染付。外面は梅の一枝文。口縁部と高台際に圏線。見込には圏線。
	101	第1トレンチ 黄褐色砂質土下層	磁器。染付。外面は水辺に河骨文。見込は口縁部に雷文帯、二条の圏線。器高は5.4㎝。
	102	〃	磁器。染付。外面は蝶文。見込は口縁部に二条の圏線。
	103	第1トレンチ 暗灰褐色砂質土層	磁器。染付。外面は区割内に花文。見込は無文。口縁端に鉄釉。藍がにじむ。
	104	〃	磁器。染付。外面は花文繋。見込は口縁部に木葉文繋。口径10.7㎝、器高5.6㎝。藍の色は鮮やか。
	105	〃	磁器。染付。外面は花文。見込は口縁部に木葉文繋。端反り型。器高5.5㎝。
	106	〃	磁器。染付。高台際に二条の圏線。高台内に銘。藍の色はやや鈍い。高台径4.15㎝。
	107	第1トレンチ 黄褐色砂質土下層	磁器。染付。見込は二条の圏線と、中央に松竹梅の繋。高台径3.5㎝。
	108	第1トレンチ 暗灰褐色砂質土層	磁器。染付。外面は菊花文ちらし。見込は圏線、中央に梅花文。口径11.4㎝、器高6.2㎝。
	109	〃	磁器。染付。外面は二重網目文。見込は無文。厚手のつくり。口径9.9㎝、器高5.4㎝。有田地方。
	110	第1トレンチ 黄褐色砂質土下層	磁器。染付。外面は唐草文、高台内に渦福銘。有田地方。
鉢	111	第1トレンチ 暗灰褐色砂質土層	磁器。染付。外面は桜花文。見込は桜花文ちらし。
	112	〃	磁器。色絵。瓔珞文を内外面に描く。
	113	第1トレンチ 黄褐色砂質土下層	磁器。染付。文様不明。
	114	〃	磁器。染付。外面は葉文様。内面は菊花文。
	115	第1トレンチ 暗灰褐色砂質土層	磁器。染付。外面は不明。内面は口縁部に波濤文。八角鉢。

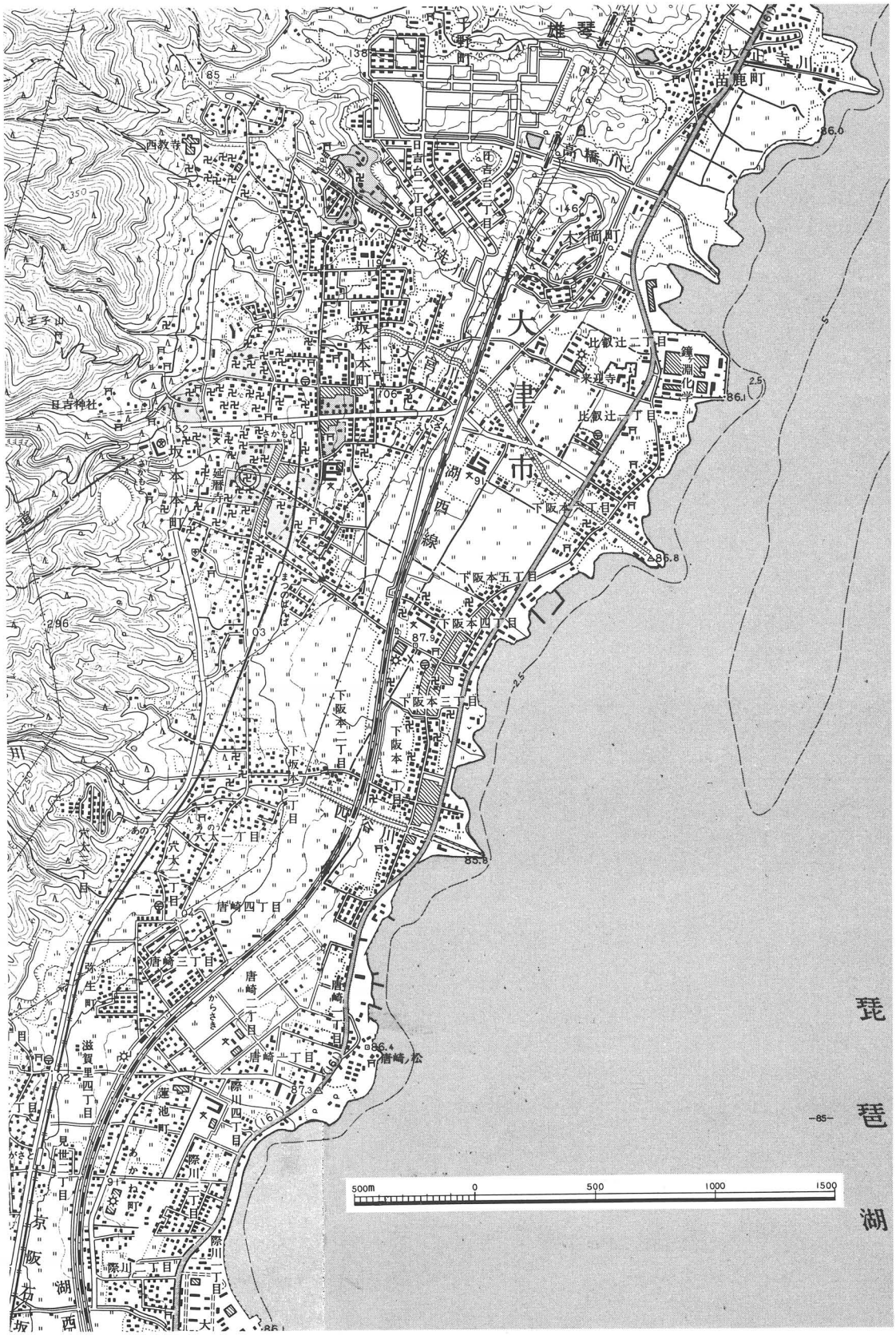
	１１６	第１トレンチ 暗灰褐色砂質土層	磁器。染付。外面は魚文。１１５と同種。
	１１７	〃	磁器。染付。外面 は不明。内面は菊花文。
	１１８ １１９	第１トレンチ 黄褐色砂質土下層	磁器。染付。文様は不明。吹墨手法。
湯　呑	１２０	第１トレンチ 暗灰褐色砂質土層	磁器。染付。外面は海浜風景図。高台内に銘があるが不明。藍の発色は悪い。端反り型。器高4.4㎝。
	１２１	〃	磁器。染付。外面は魚籠に釣竿図。高台際に蓮弁繋。器高5.2㎝。
	１２２	〃	磁器。染付。外面は花文。内面は口縁部に鎖文帯。
	１２３	第１トレンチ 黄褐色砂質土下層	磁器。染付。外面は不明。内面は口縁部に連弧文帯。
	１２４	第２トレンチ 暗褐灰色砂質土層	磁器。染付。外面は雨降り柳と雷図。柳の葉を濃淡で表わし、雷を鍵形の線で描く。口縁端に鉄釉。
	１２５	第１トレンチ 暗灰褐色砂質土層	磁器。染付。見込中央に松と鶴文。押型の文様の上に藍色を施す。口径9.6㎝、器高4.6㎝。
	１２６	〃	磁器。染付。外面は図案化された文字文様。端反り型。口径8.4㎝、器高4.2㎝。愛知県かみた窯。
	１２７	〃	磁器。染付。高台内に銘文。内面は五弁花文。
	１２８	第１トレンチ 黄褐色砂質土下層	磁器。摺絵。外面は摺絵。内面は口縁帯と中央に摺絵。藍の色はやや紫色。器高5.5㎝。明治時代。
皿	１２９	第１トレンチ 暗灰褐色砂質土層	磁器。染付。外面は口縁部に圏線。内面は流水に紅葉を描く。藍の色はやや黒っぽい。器高3.6㎝。
	１３０	〃	磁器。染付。内面は二重の格子文。口径１0.0㎝。
	１３１	〃	磁器。染付。外面は唐草文。内面は雲と雁を軽く淡く描く。
	１３２	第１トレンチ 黄褐色砂質土下層	磁器。染付。外面は唐草文。内面は草花文。
	１３３	〃	磁器。染付。内面は菊花文。藍の色は緑がかる。
	１３４	第１トレンチ 暗灰褐色砂質土層	磁器。染付。外面は唐草文。内面は七草手唐草文。有田地方。
	１３５	第１トレンチ 淡黒褐色砂礫土層	陶器。染付。内面は名所図絵（高尾）。口縁端に染付。口径１1.7㎝、器高2.4㎝。
燗徳利	１３６ ～ １３８	第１トレンチ 黄褐色砂質土下層	白磁。無文。
盃	１３９	〃	磁器。色絵。外面は赤富士が描かれたかるたと花文様。内面中央は赤絵梅花文。口径8.6㎝、器高2.6㎝。
	１４０	〃	白磁。外面中程に細い突帯をめぐらす。口径6.0㎝、器高2.9㎝。
	１４１	第１トレンチ 暗灰褐色砂質土層	陶器。染付。外面は「霜」などの字を描く。胎土が灰色。

小　皿	142	第1トレンチ 黄褐色砂質土下層	磁器。草木釉。
小　碗	143	第1トレンチ 暗灰褐色砂質土層	〃
碗	144	〃	陶器。京焼。高台内に刻印。
鉢	145	第1トレンチ 黄褐色砂質土下層	陶器。外面に錆絵の松文。
	146	第2トレンチ 暗茶褐色土層	陶器。内面に菊花文。
土　瓶	147 ～ 150	第1トレンチ 暗灰褐色砂質土層	陶器。繊部釉。体部外面に葡萄文。
	151 152	第1トレンチ 黄褐色砂質土下層	陶器。筒描手法を用いているが、文様は不明。
	153 154	〃	瓷器。内面に鉄釉。精良の土でよく焼きしまっている。 京焼か。
	155	〃	陶器。草木釉。蓋の裏に墨書。
	156	第2トレンチ 暗褐灰色砂質土層	陶器。草木釉。
行　平	157	第2トレンチ 茶褐色砂質土層	陶器。蓋の外面は、筒描笹葉文。内面は淡い鉄釉。
	158	第1トレンチ 黄褐色砂質土下層	陶器。鉄釉。
	159	第1トレンチ 暗灰褐色砂質土層	陶器。鉄釉。把手がつく。
	160 161	〃	陶器。白釉。口径13.6㎝。
	162	〃	陶器。外面は飛鉋。
	163	〃	陶器。把手。人物の型押。
摺　鉢	164	〃	陶器。鉄釉。
	165	第1トレンチ 淡黒褐色砂礫土層	陶器。鉄釉。高台付。
	166	第1トレンチ 暗灰褐色砂質土層	陶器。無釉。
	167	〃	陶器。信楽。平底。
徳　利	168	〃	陶器。灰釉。
	169	第1トレンチ 黄褐色砂質土下層	陶器。鉄釉。
	170	第1トレンチ 淡黒褐色砂礫土層	陶器。鉄釉。小型。
五　徳	171	第1トレンチ 黄褐色砂質土下層	素焼。

こんろ	１７２	第１トレンチ 淡黒褐色砂礫土層	素焼。こんろの簀。
火　鉢	１７３	第１トレンチ 暗灰褐色砂質土層	陶器。緑釉。獅子の口に環を通す。阿波の中山窯か。
仏花器	１７４	第２トレンチ 茶褐色砂質土層	陶器。鉄釉。
仏飯器	１７５	第１トレンチ 黄褐色砂質土下層	陶器。草木釉。脚部。回転糸切痕。
水　瓶	１７６	第１トレンチ 暗灰褐色砂質土層	陶器。瑠璃釉。蓋。
燈明皿	１７７	第２トレンチ 暗褐灰色砂質土層	陶器。草木釉。受け皿。
	１７８	第１トレンチ 暗灰褐色砂質土層	〃
	１７９	第１トレンチ 黄褐色砂質土下層	陶器。草木釉。油皿。
	１８０	第１トレンチ 暗灰褐色砂質土層	〃
	１８１	第２トレンチ 暗黄褐色砂質土層	土師質に施釉。油皿。
紅　皿	１８２	第１トレンチ 黄褐色砂質土層	磁器。型押し。外面は菊花状。内面は白釉。口径４.４㎝、器高１.４㎝。
	１８３	第１トレンチ 暗灰褐色砂質土層	〃　口径４.８㎝。
香油瓶	１８４	〃	磁器。染付。蛸唐草文。
香　炉	１８８	第２トレンチ 暗茶褐色土層	青磁。内面無釉。
甕	１８９	第３トレンチ	陶器。鉄釉。器高６０㎝。

図　　版

図版一　遺跡位置図



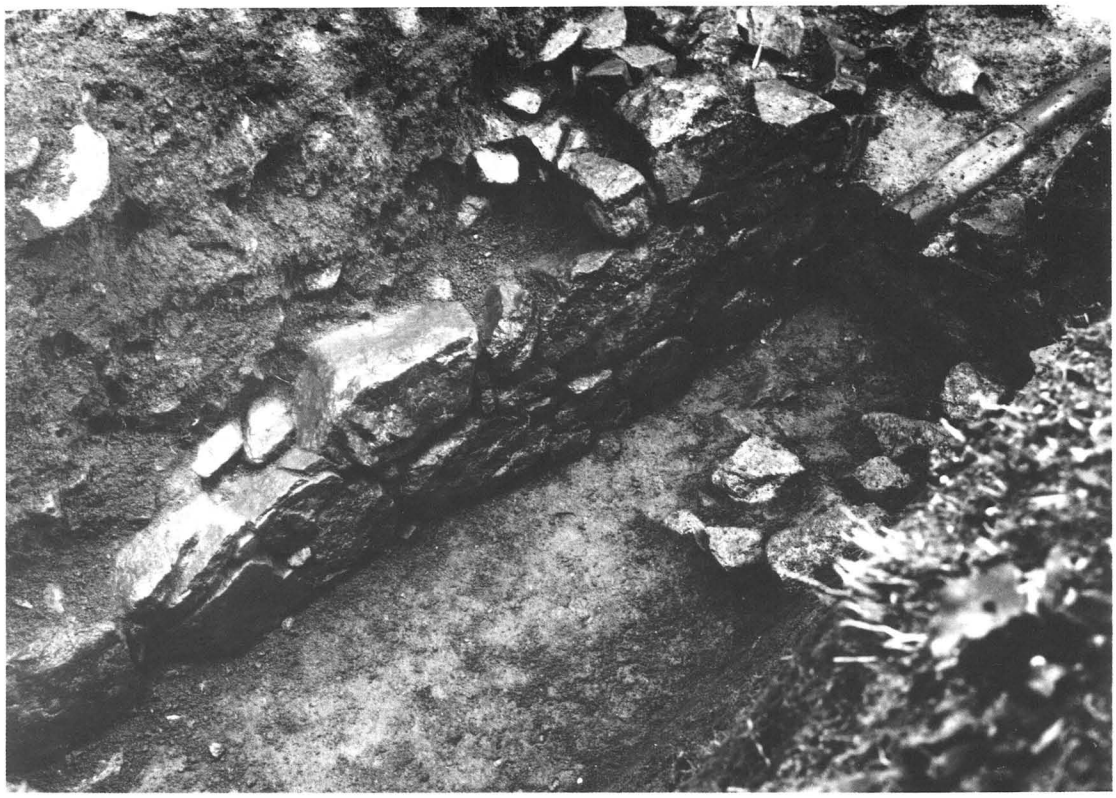
琵琶湖
大津市
坂本本町
坂本
唐崎四丁目
唐崎三丁目
唐崎二丁目
唐崎一丁目
下阪本五丁目
下阪本四丁目
下阪本三丁目
下阪本二丁目
下阪本一丁目
比叡辻二丁目
比叡辻一丁目
木岡町
苗鹿町
大宮川
湖西線
際川四丁目
際川二丁目
際川一丁目
蓮池町
滋賀里四丁目
弥生町
穴太一丁目
穴太二丁目
穴太三丁目
西教寺
日吉神社
延暦寺
来迎寺
鐘ヶ淵化学
500m
0
500
1000
1500

事務所正面

第1トレンチ（西より）

第1トレンチ（東より）

石組遺構（北より）

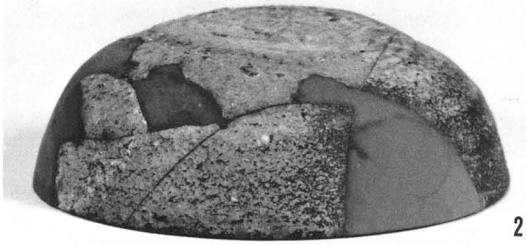


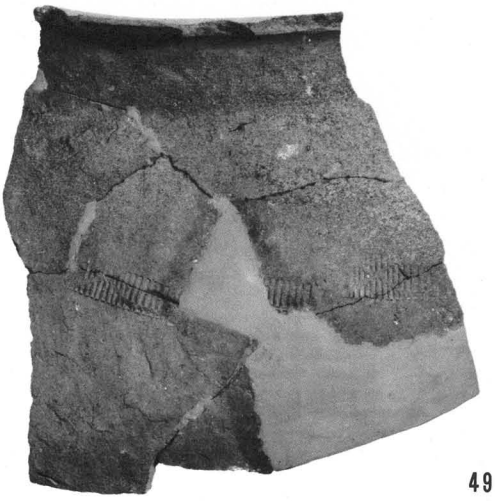
第２トレンチ（南より）

第３トレンチ（南より）

1

9


2

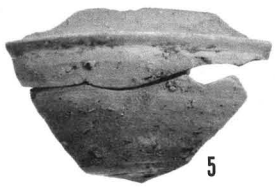

49

3

4

6

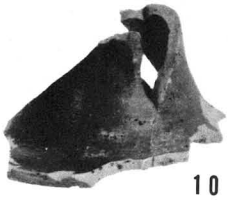
8


5

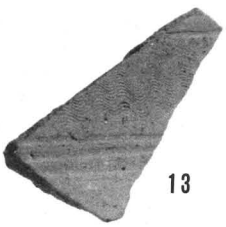
7

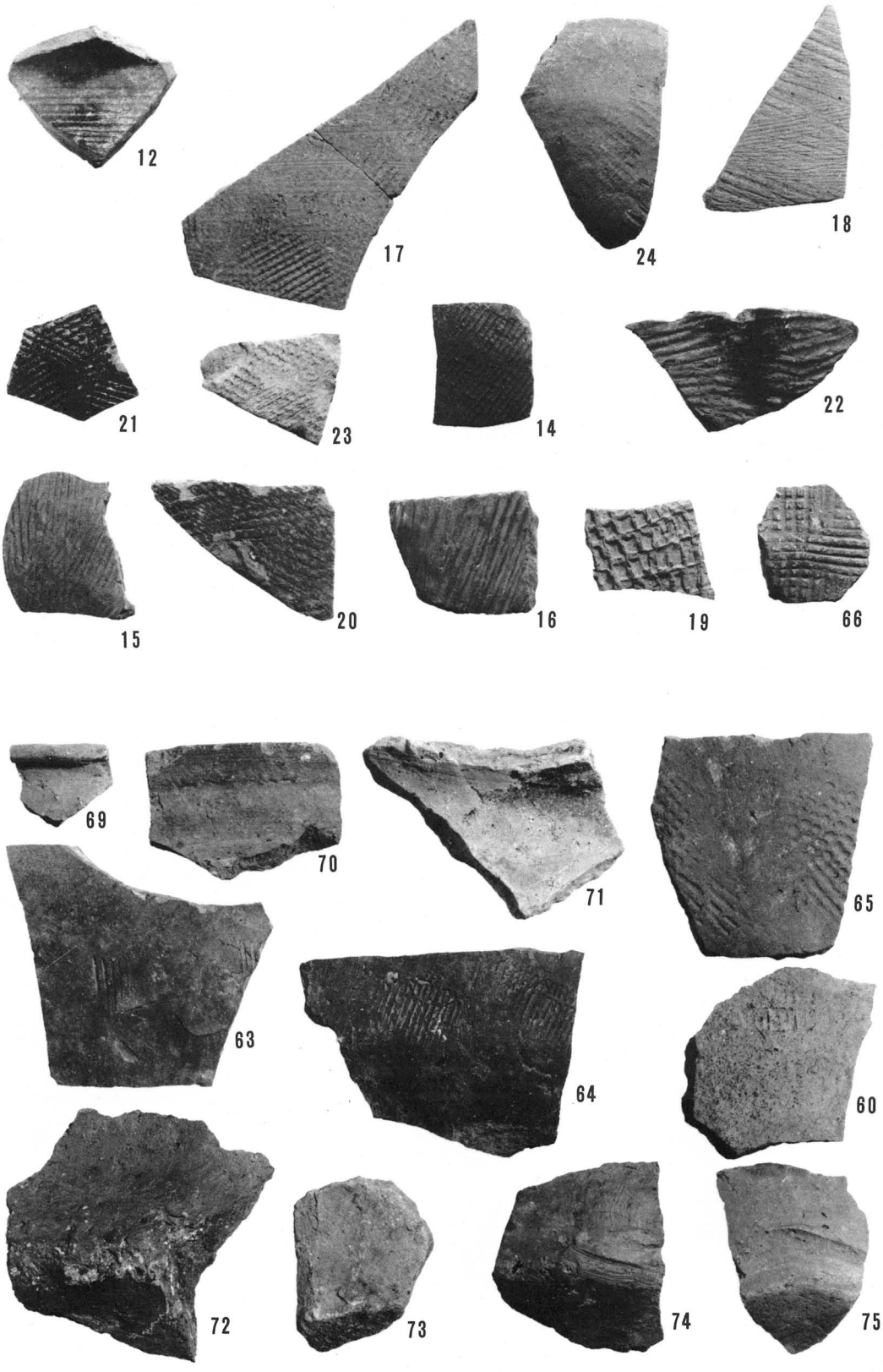
67

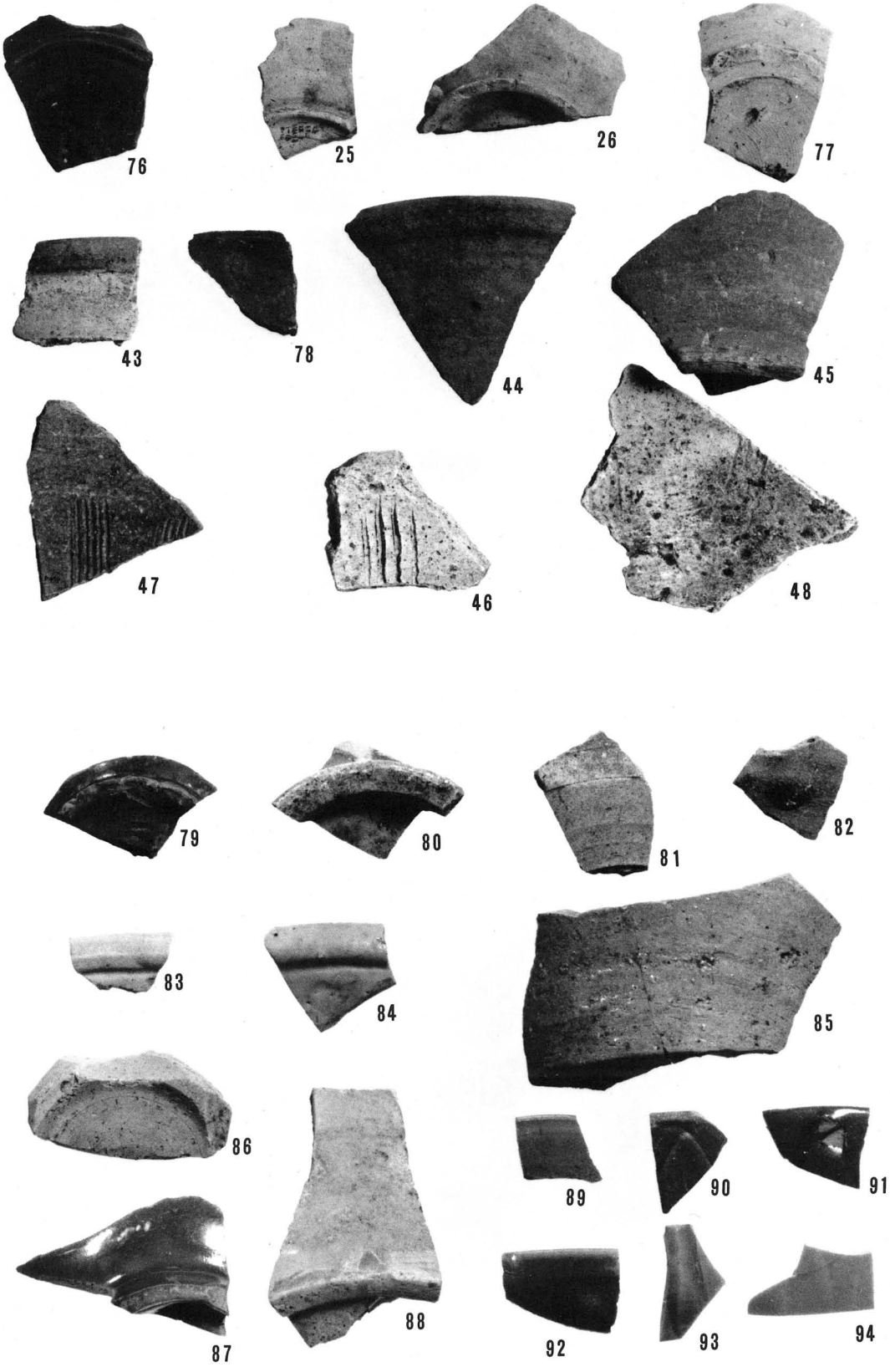
68

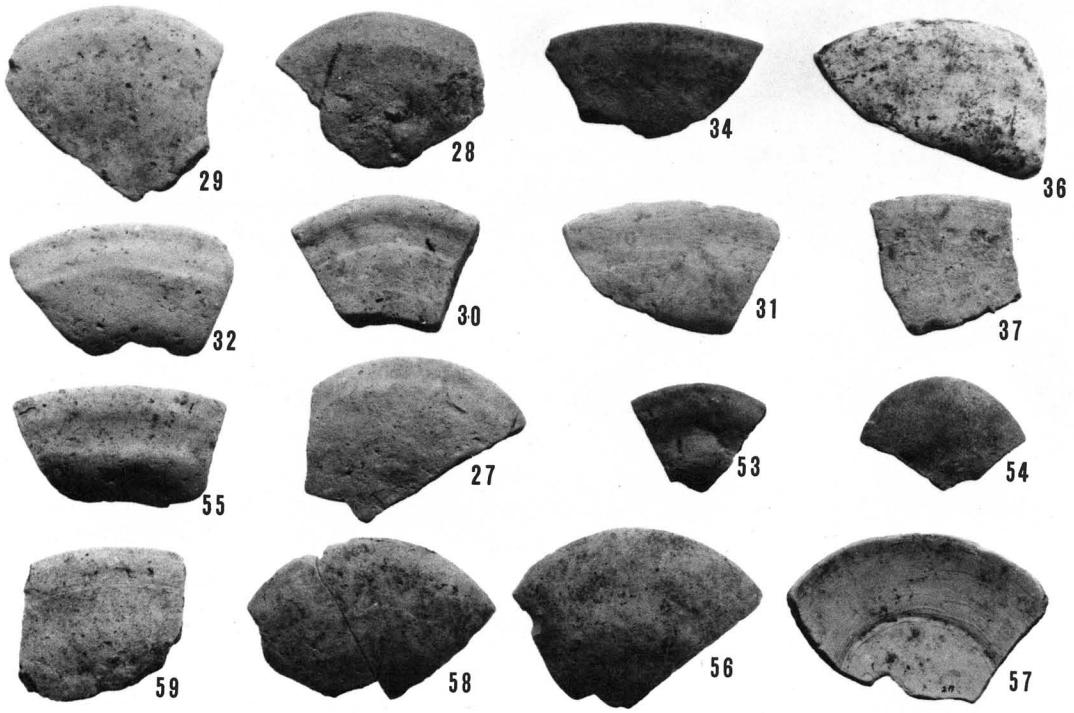

10

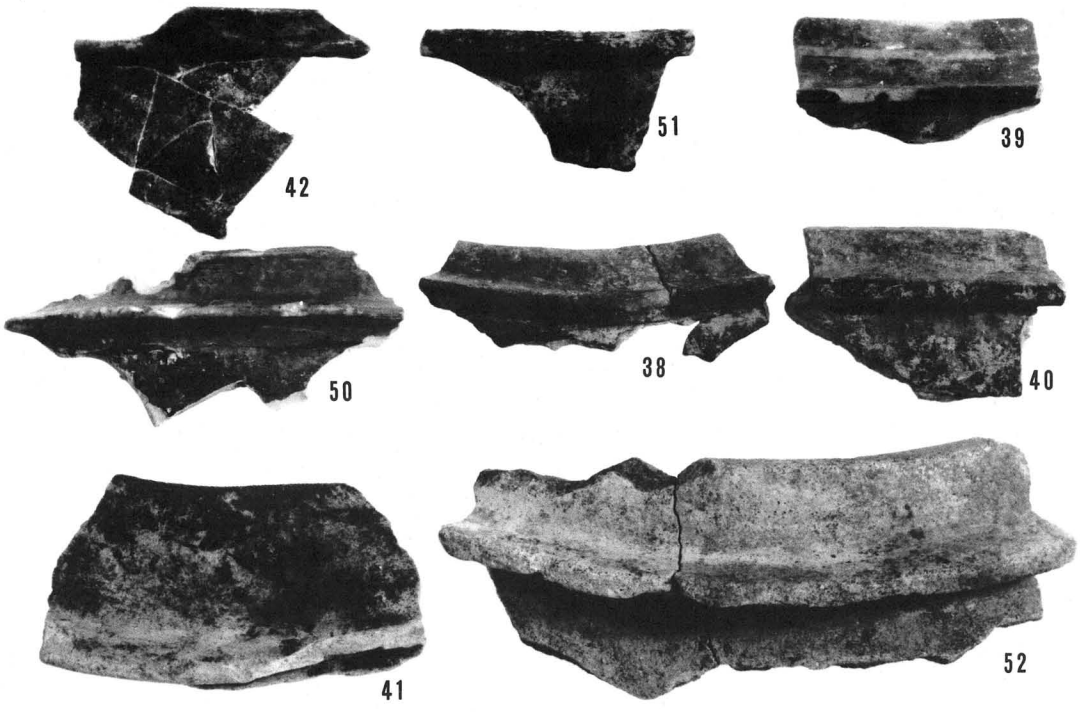
11


13

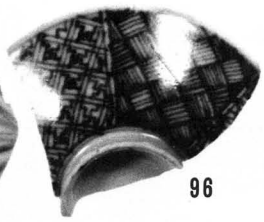

12
17
24
18
21
23
14
22
15
20
16
19
66
69
70
71
65
63
64
60
72
73
74
75


76
25
26
77
43
78
44
45
47
46
48
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94


29
28
34
36
32
30
31
37
55
27
53
54
59
58
56
57


42
51
39
50
38
40
41
52

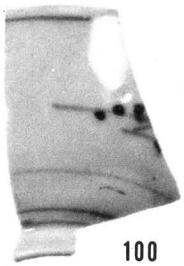
95


96

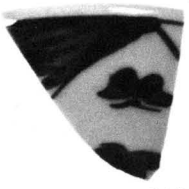
97

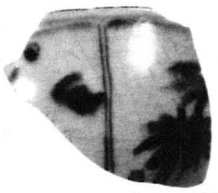
98

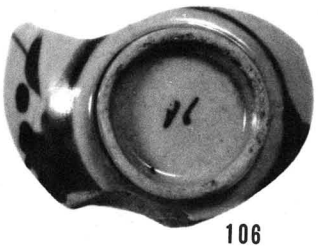
99

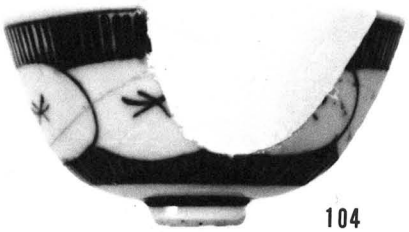

100

101


102


103

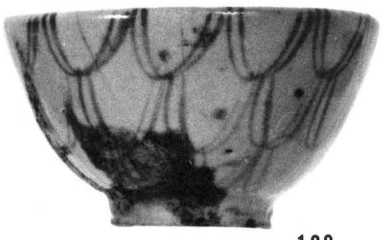

106


104

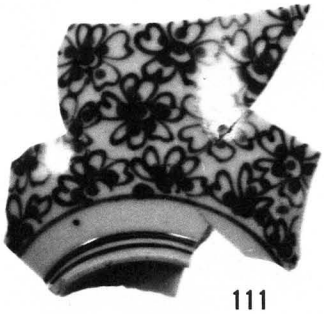
105

107

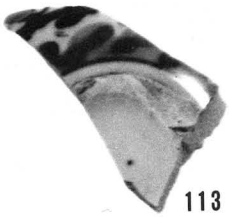
108

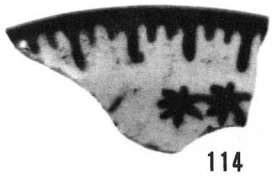

109

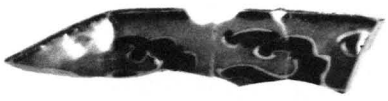
110

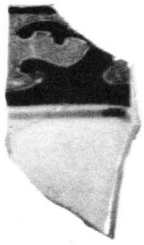

111

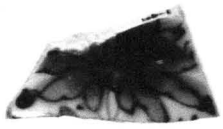
112

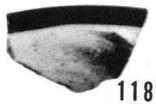

113

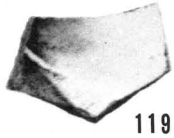

114

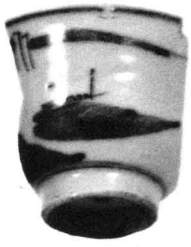

115


116

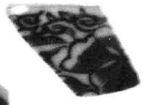

117

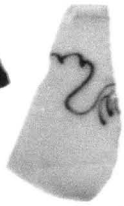

118

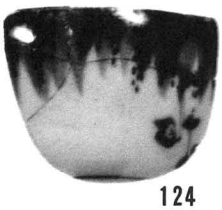

119

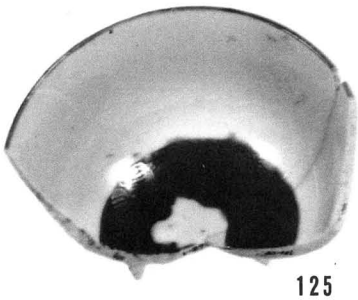

120

121

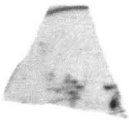

122


123

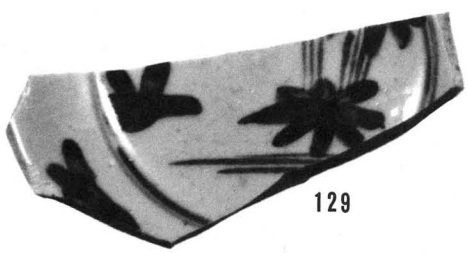

124

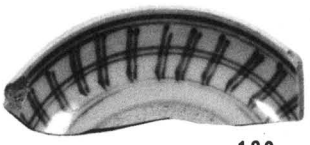

125

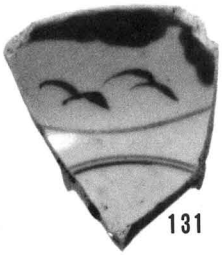
126


127

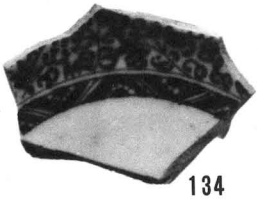
128

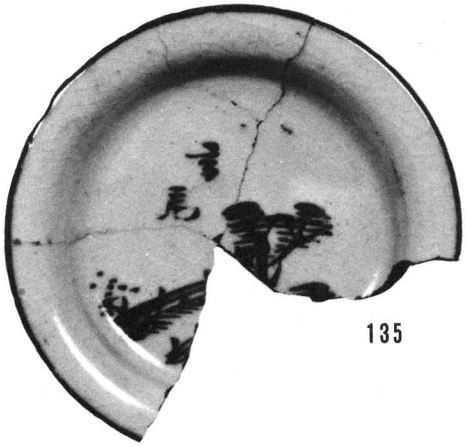

129

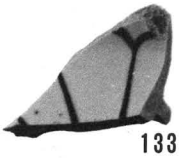

130

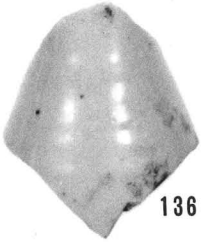

131

132


134


135


133

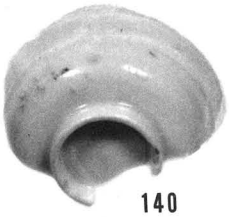

136

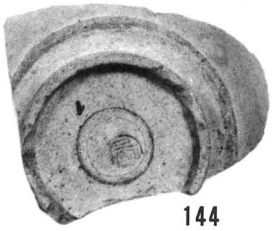
139

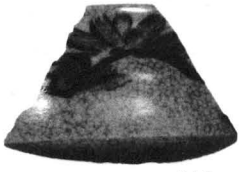
142

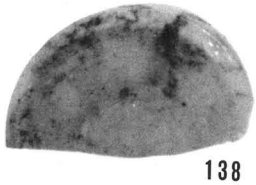
143

137

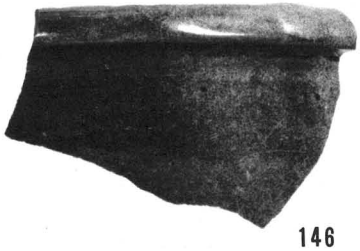

140

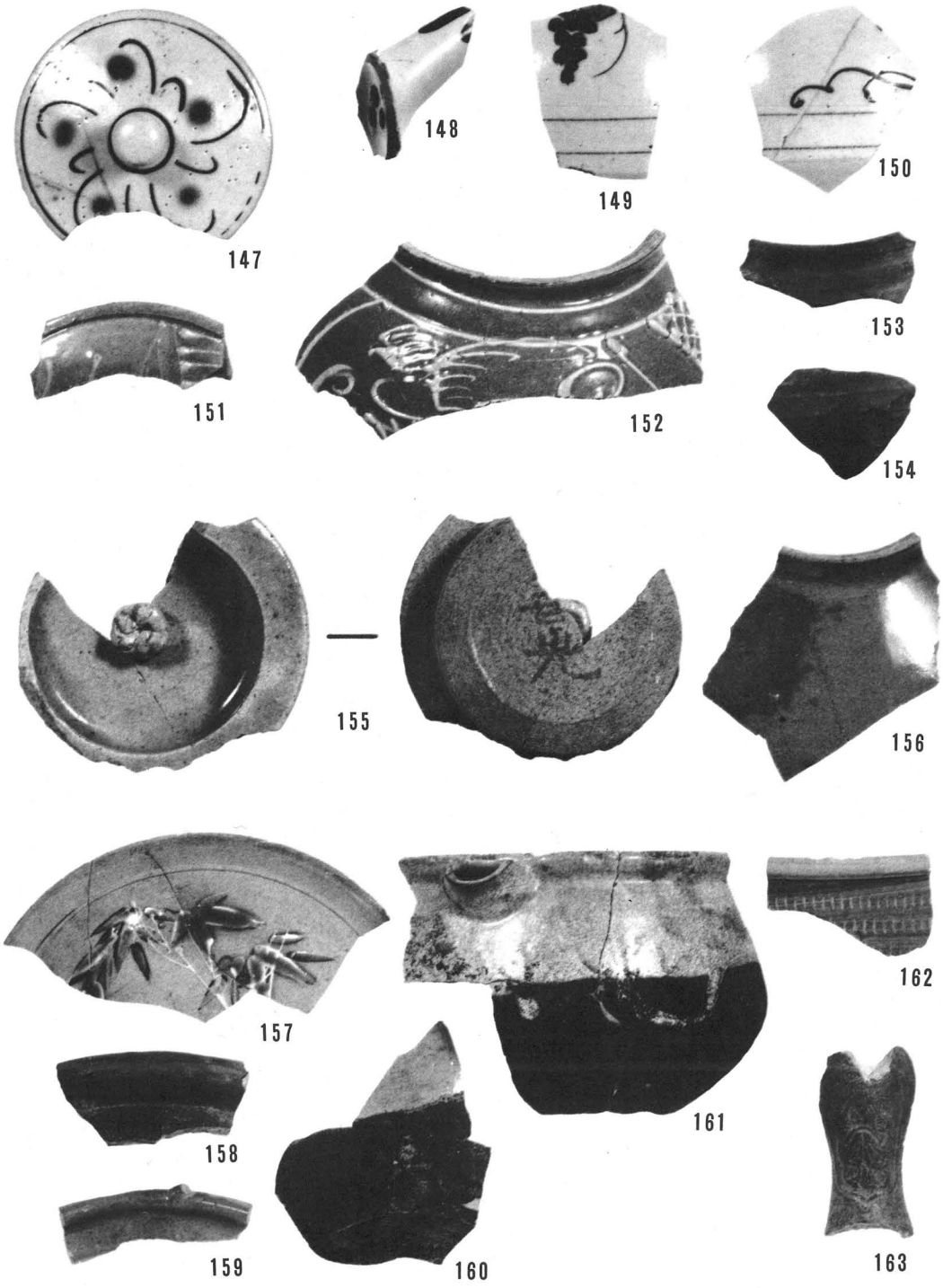

144

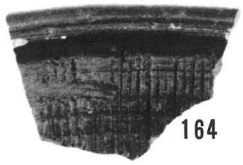

145

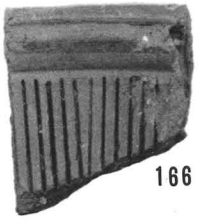

138

141


146


147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163

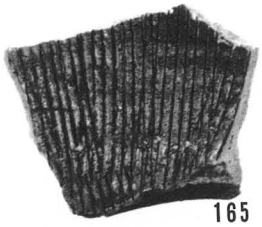

164

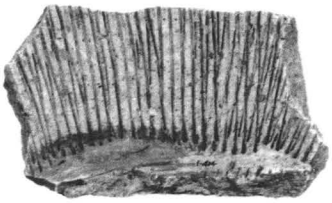

166

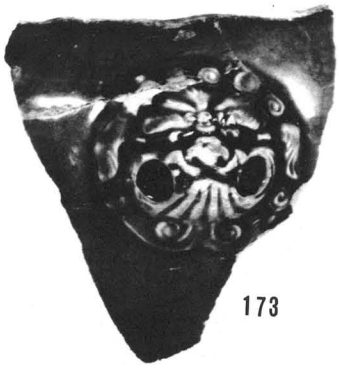
168

169

170

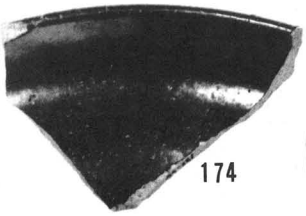

165


167


173

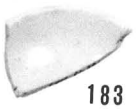
171

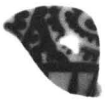
172


174

177

182


183


184

175

178

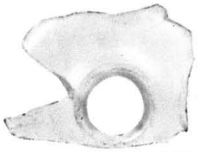
185

179

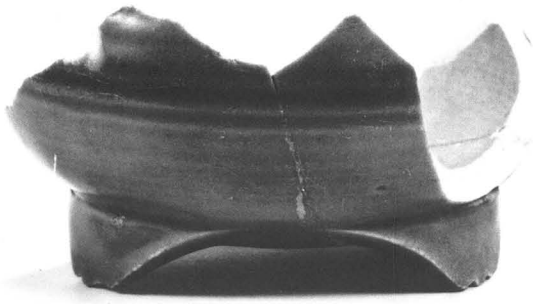
180

176

181


186

187



188

190

191

192

193

189

194

瓦製の円筒

195

196

延暦寺発掘調査報告書 Ⅲ

昭和５７年３月

編　集　滋賀県教育委員会
発　行　滋賀県教育委員会
　　㈶滋賀県文化財保護協会
印　刷　富士出版印刷株式会社